

令和元年6月25日現在

機関番号：32685

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K02531

研究課題名(和文) インドネシアにおける民族語とマレー語変種の使い分け状況および地域特徴の研究

研究課題名(英文) A Research on Language Use and Areal Features of Ethnic Languages and Malayic Varieties in Indonesia

研究代表者

内海 敦子 (Utsumi, Atsuko)

明星大学・人文学部・教授

研究者番号：70431880

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：インドネシアでは約700の民族語が話されているが、マレー語の一変種である「インドネシア語標準変種」がほぼすべての国民に使用されている。これは国家語で書記言語として確立している変種だが、その他に地域共通語としても用いられる「インドネシア語口語変種」も使用されている。後者の変種は地域的変異が大きい。これまで標準変種との違いに焦点が当たってこなかった。本研究課題においては消滅の危機にある少数民族言語の記述を進めることにより、それらの民族語の影響を受けた「インドネシア語口語変種」の特徴を明らかにし、民族語とインドネシア語の相互関係を確認することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

インドネシアにおいて、記述言語学の対象言語は多くの記述が不十分な民族語になりがちである。一方、インドネシア語標準変種は国家語としてインドネシア国民への教育に必要なだけでなく、外国人がインドネシア国内で使用するため学習する言語として常に選ばれるため、研究が盛んである。しかし、当研究課題において特に力を入れた「インドネシア語口語変種」の調査によって、それぞれの地域で話されている民族語の影響がみられ、多くの地域的変異が存在することが分かった。また、インドネシア語口語変種と民族語がどのような使い分けがされているかについても社会言語学的調査により明らかにすることができた。

研究成果の概要(英文)：Indonesia is a country with some seven hundred ethnic languages with the standardized variety of Malay, namely standard Indonesian, as the common language all over the country. It has a long tradition as a written language, and it has small diversity when it is used in a very formal situation. However, when it is used as a common language, namely Colloquial Variety of Indonesian, varieties of areal features emerge including phonological, lexical and grammatical influences from indigenous ethnic languages. These regional common Indonesian varieties have not attracted researchers' attention since they were regarded to be very similar to the standard variety.

In this research, endangered ethnic languages were studied and then compared with the colloquial varieties of Indonesian which are spoken in the same areas. As a result, characteristics of regional Colloquial Indonesian were pointed out that showed the mutual influences between ethnic language and the Colloquial Indonesian.

研究分野：記述言語学

キーワード：社会言語学 地域特徴 マレー語口語変種 インドネシアの少数民族言語 コードスイッチング アーカイブ化

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

インドネシアにおいて、マレー語の変種の一つ、インドネシア語標準変種は国家語とされ、書記言語としての伝統を持ちフォーマルな場面で用いられる変種である。このほか、インドネシアには 700 程度の民族語が存在している。異なる民族の間で共通語として用いられるのが民族語の影響を受けた「インドネシア語口語変種」である。地域の変種が豊かであり、急速に変化を続けるインドネシア語口語変種はほとんど研究されてこなかった。

2. 研究の目的

- (1) 本研究課題においては、これまで調査が不十分だった「インドネシア語口語変種」を調査・記述し、民族語の影響と地域の特徴の観点から分析することが目的であった。
- (2) それらの調査で得た音声・映像資料をアーカイブ化し、言語復興あるいは通時的变化研究のための資料として蓄積する。
- (3) 民族語とインドネシア語口語変種・インドネシア語標準変種がどのように場面ごとの使い分けがされているかを考察する。

3. 研究の方法

- (1) インドネシアの各地域で民族語の調査をしている研究者と連携し、社会言語学的調査票を用いて「民族語」と「インドネシア語口語変種」との使い分け状況の調査結果を得た。
- (2) また、「民族語」と「インドネシア語口語変種」の記述を比較検討し、前者が後者に及ぼす影響を音声・形態・統語・談話の各レベルにおいて連携研究者と報告しあった。
- (3) 申請者は自身で北部スラウェシ州、中部・南部スマトラ島、バリ島にてインドネシア語口語変種、マレーシアのランカウイ島にてマレー語の口語変種の談話データを収集し、文献資料はインドネシア、マレーシア、ブルネイの 3 か国で収集した。

4. 研究成果

本研究により、インドネシア語標準変種とは異なる「インドネシア語口語変種」に様々な地域差が見られ、かつ伝統的なマレー語の特徴とは異なる特徴を表すようになってきていることが確かめられた。これまではインドネシアにおいては国家語たる「インドネシア語標準変種」と 700 を超える民族語のどちらかに焦点が当たることが多かったが、今後は急速に変わりつつあり多くの変異を持つ「インドネシア語口語変種」の調査がより進められるようになるであろう。

また、インドネシア各地の民族語を研究している研究者との連携を様々な国際会議や国際ワークショップにおいて行った結果、民族語だけでなくインドネシア語口語変種の研究も進める研究者が現れ、多くの知見が集まってきた。

(1) インドネシアにおける民族語が、インドネシア語口語変種および他の民族語との関係によって使い分け状況がどのように変わってくるかを論文にまとめた。インドネシア語口語変種の勢力の強さは民族語の置かれた状況と関連している。ただし、どんな環境においてもインドネシア語標準変種が教育機関における主要な使用言語であるため、その影響を受けて学校ではインドネシア語口語変種が児童・生徒間でも用いられやすくなっている。民族語の置かれた状況毎の使用状況が以下のように明らかになった。

多くの少数民族語が話されている北部スラウェシ州や東ヌサ・トゥンガラ諸島においてはインドネシア語口語変種の勢力が強い。民族語の使用場面は減っている。子育て世代が幼い子供にまず教える言語がインドネシア語口語変種であることが増えているので、民族語の将来的見通しは暗く、消滅に近づいているといえる。

スマトラ島南部の Lampung 語地域のように、単一とみられる言語が話されている地域であっても、Lampung 語のように方言差が激しい言語が話されている地域ではインドネシア語口語変種の勢力が強まり、民族語が衰退していることが確認された。

ジャワ語、スンダ語、バリ語のように単一の民族語の勢力が強い地域では民族語の勢力はあまり衰えていないが、インドネシア語口語変種と民族語との相互影響関係は強い。民族語の要素は、対人関係によって左右される要素に強くみられることが分かった。例えば談話的小辞や敬称・呼称 (Mr., Ms. に相当するようなもの) は地域差と民族差が強くみられ、インドネシア語口語変種の地域的変異を構成する。

また、ジャワ語などのように敬語体系が複雑な言語の場合、不適切な敬語を用いることを恐れる若い世代が、目上の人と話す場面や、公的な場面で、民族語よりもインドネシア口語変種を好んで用いることが観察された。

大都市をかかえている地域 (首都ジャカルタおよびそれぞれの地域の中核都市) であったり、

インドネシア政府によるジャワ民族の移住政策が推進されていた地域では、ジャワ語や元々その地域に存在した民族語の使用が継続されている一方で、インドネシア語口語変種の使用場面が増加している。若い世代の利用者もいるが、民族語の使用場面は徐々に減っている。

(2)インドネシアにおける民族語がインドネシア口語変種に及ぼす影響について、インドネシア各地およびマレーシアでの現地調査によって以下のことが明らかになった。

音声の面では、音素に関しては民族語の影響はあまり明らかにならない。例えばジャワ語においては語末の/a/が/o/に変化する傾向があるが、ジャワ語地域で話されているインドネシア語口語変種にはそのような傾向はみられないこともある。一方で、マレーシア半島からスマトラ島中部においては/a/が/o/に変化する傾向があり、これはその地域で話されている各種のマレー系民族語の影響が強くみられる。一方、ストレスのパターンについていえば、民族語が語末音節にストレスが置かれる場合はインドネシア語口語変種においても語末音節に置かれるといったように相関関係が強くみられた。

形態の面では民族語の影響はあまりみられない。一方、語彙の面では民族語の語彙が食べ物、植物、動物などの意味分野において多く借用されるほか、敬称・呼称や談話的小辞も民族語の要素がインドネシア語口語変種によく使用されることが分かった。

(3) 北部スラウェシ島の少数民族語、Bantik 語、Talaud 語、Tonsawang 語の現地調査を行った。その調査をまとめた成果が以下の通りである。

Bantik 語の談話構造の研究を行い、事物の言及方法(reference marking)や情報構造のマーカーについて考察した。

Talaud 語について 12 の地点で語彙項目の調査を行い、地域変種の分布が明らかになり、分類が可能になった。

Tonsawang 語の現地調査により、音声・音韻・形態について分析を進めることができた。

(4) 民族語とインドネシア語口語変種の音声資料をメルボルン大学および東京外国語大学のアーカイブにアップロードし、研究者と民族語話者が自由にアクセスできるようにした。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 11 件)

内海敦子、「茨城県大洗町のインドネシア人：日系三世と「研修生」のケーススタディ」、『明星大学研究紀要 人文学部 日本文化学科』、査読無、第 27 号、2019 年、pp 87-106

内海敦子、「談話におけるインドネシア語のヴォイス：バリ島で話されているインドネシア語の談話の分析から」、『明星大学研究紀要 人文学部 日本文化学科』、査読無、第 26 号、2018 年、pp 67-80

Atsuko Utsumi, RICE: Austronesian languages, Studies in Asian Geolinguistics VIII, 査読有、2018 年、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、pp 3-4

Atsuko Utsumi, Accent: Formosan and West Malayo-Polynesian languages (Austronesian), Studies in Asian Geolinguistics VIII, 査読有、2018 年、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、pp 17-18

Atsuko Utsumi, "It Rains": Austronesian languages, Studies in Asian Geolinguistics VIII, 査読有、2018 年、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、pp 41-42

内海敦子、「インドネシアにおける民族語存続の展望」、『明星大学研究紀要 人文学部 日本文化学科』、査読無、第 25 号、2017 年、pp 118-144

Atsuko Utsumi, "Wind" in Austronesian Languages, Studies in Asian Geolinguistics IV, 査読有、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、2017 年、pp 20-21

Atsuko Utsumi, A Dialectal Study of Talaud - Dialectal Classification and a Comparative Word List -, 『明星大学研究紀要 人文学部 日本文化学科』、査読無、第 24 号、2016 年、pp 37-70

Atsuko Utsumi, The intonation of interrogatives and focused elements in Bantik, Proceedings for the third workshop on information structure of Austronesian languages. 、査読無、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、2015 年、pp 45-58

Atsuko Utsumi, Topic-marking Constructions in Bantik, Proceedings for the second workshop on information structure of Austronesian languages. 、査読無、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、2015 年、pp 42-51

内海敦子、「北スラウェシ州の民話の分類」日本インドネシア学会学会誌『言語と文化』、査読無、第 21 号、2015 年、pp 67-75

〔学会発表〕(計 21 件)

Atsuko Utsumi, Research on stress and intonation in varieties of Malay: the case of Manado Malay and Lampung Malay, 2nd International Workshop on Varieties of Malayic

- Languages, 2018 年 10 月 13 日、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
- Yoshimi Miyake and Atsuko Utsumi, Different Styles and Registers of Bahasa Indonesia spoken by Javanese people, 14th International Conference on Austronesian Linguistics, 2018 年 7 月 19 日、Université Antananarivo
- Atsuko Utsumi, Discourse Functions of the Aspectual Clitics in Bantik, 14th International Conference on Austronesian Linguistics, 2018 年 7 月 17 日、Université Antananarivo
- Atsuko Utsumi, The Tonsawang Language's Basic Morphology and Syntactic Features, 28th Meeting of Southeast Asian Linguistics Society, 2018 年 5 月 19 日、文藻大学、中華民国(台湾)高雄
- Atsuko Utsumi, Address Terms in Indonesia, Fourth International Conference on Asian Geolinguistics 2018 年 5 月 4 日、Universitas Indonesia, インドネシア国ジャカルタ
- Atsuko Utsumi, Malay Variety Project, First International Workshop on Varieties of Malayic Languages, 2017 年 12 月 19 日、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
- Atsuko Utsumi, Stress in Austronesian, 第八回アジア地理言語学研究会, 2017 年 12 月 16 日、アジア・アフリカ言語文化研究所, 東京外国語大学
- 内海 敦子, Lampung 調査報告、第二回マレー語方言の変異の研究研究会, 2017 年 10 月 15 日、東京外国語大学 アジア・アフリカ言語文化研究所
- Atsuko Utsumi, Voice Selection in Indonesian: A Case of the Bali Dialect, 21st International Symposium on Malay/Indonesian Languages, 2017 年 5 月 4 日、マレーシア、Langkawi Research Center
- 内海 敦子, マレー語変種に関わる術語の整理、第一回マレー語方言の変異の研究研究会, 2017 年 4 月 23 日、東京外国語大学 アジア・アフリカ言語文化研究所
- 内海 敦子, インドネシアにおける国家語と民族語 - 700 の言語が息づく島々の多言語状況 -、慶應義塾大学言語文化研究所 公開講座、2016 年 10 月 22 日、慶應義塾大学
- Atsuko Utsumi, Markers for Introducing a New Referent in the Bantik Language, Kongress International Masyarakat Linguistik Indonesia (KIMLI, International Congress of Linguistic Society of Indonesia), 2016 年 8 月 25 日、インドネシア国デンパサール、Udayana University
- Atsuko Utsumi, Intonation patterns and information structure in the Bantik language, The 26th Annual Meeting of Southeast Asian Linguistics Society, 2016 年 5 月 27 日、フィリピン国マニラ、Century Park Hotel
- Atsuko Utsumi, Areal Features on Directionals and Relative Height Terms in East Indonesia, The 3rd International Conference on Asian Geolinguistics, 2016 年 5 月 23 日、Cambodia Japan Cooperation Center, The Royal University of Phnom Penh, Cambodia
- Atsuko Utsumi, Talaud Dialectal Differences, Workshop at Pusat Kajian Bahasa dan Budaya (Center for Research on Language and Culture), 2016 年 3 月 3 日、インドネシア国、ジャカルタ、Atma Jaya University
- Atsuko Utsumi, The Intonation of Interrogatives and Focused Elements in the Bantik Language, The 3rd International Workshop on Cross-linguistic perspective on Information Structure of Austronesian Languages, 2016 年 2 月 18 日、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
- Atsuko Utsumi, Dialectal Differences in the Talaud Language, Workshop on Language Documentation at Manado. 主催: Linguistic Dynamics Science Project (LingDy2), 共催: Manado State University and ILCAA, TUFS. 2015 年 7 月 21 日、インドネシア国、マナド、Manado State University
- Atsuko Utsumi, Directional and Relative Height Terms in Sangiric Languages, The 13th International Conference on Austronesian Linguistics, 2015 年 7 月 21 日、中華民国(台湾) Academia Sinica (中央研究所)
- Atsuko Utsumi, Potential and Accidental Verbs in Sangiric Languages, The 13th International Conference on Austronesian Linguistics, 2015 年 7 月 18 日、中華民国(台湾) Academia Sinica (中央研究所)
- Atsuko Utsumi, インドネシア・フィリピンの諸言語における情報構造の分析、第 150 回 日本語学会、2015 年 6 月 20 日、大東文化大学板橋キャンパス
- ⑳ Atsuko Utsumi, Markers for Information Structure in WMP languages, 第五回「オーストロネシア諸語の情報構造」研究会、2015 年 5 月 10 日、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

{図書}(計 1 件)

Sonja Riesberg, Asako Shiohara, and Atsuko Utsumi eds. 編集、*Perspectives on information structure in Austronesian languages*, 2018 年、440 ページ

〔産業財産権〕

出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

内海 敦子 (UTSUMI ATSUKO)
明星大学・人文学部日本文化学科・教授
研究者番号：7 0 4 3 1 8 8 0

(2) 連携研究者

山口 真佐夫 (YAMAGUCHI MASAO)
摂南大学・外国語学部・教授
研究者番号：0 0 1 9 2 3 9

塩原 朝子 (SHIOHARA ASAKO)
東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・准教授
研究者番号：3 0 3 1 3 2 7 4

稲垣 和也 (INAGAKI KAZUYA)
南山大学・外国語学部アジア学科・准教授
研究者番号：5 0 5 5 9 6 4 8

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。